

第2回 古文書を読む上での知識

巻島 隆

はじめに

今日は変体仮名、異体字、近世干支年表、方位・時刻図、度量衡・通貨表について説明します。後半は「習字手本」を読んでみます。

1 変体仮名と異体字

変体仮名はいろいろ仮名（平仮名）の種類がありました。とりあえず多用される変体仮名を中心に覚える方が効率的だと思います。

頻出字を読み上げるので印を付けてください。

表以外で次のような字も散見される。

鑑=鑒、同様に松=桧

染=さんずい、九木で書かれる。

杉=松

彦=彦の彑が久（のような）になっている。

2 近世干支年表

(1)甲子と辛酉

十干十二支

十干は甲乙丙丁戊己庚辛壬癸、十二支は子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。

十干は「きひつかみ」をまず覚え、きのえ（兄）、きのと（弟）、以下同じ。

甲子と辛酉は改元されることが多い。甲子革命、辛酉革命。

→干支が人名や施設の名前に使われることも。伊東甲子太郎、坂口安吾（本名、炳五）、甲子園球場など。

(2)天明は1781、文政は1818、天保は1830

覚え方はそれぞれ工夫を。語呂で覚える。主に読むのは江戸後期の古文書なので天明、寛政、享和、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応ぐらいを押さえておく。

3 方位・時刻図

(1)旧暦

月が地球の周囲を1度公転した日数が29・5日。月は1回公転したと同時に1回の自転をし終える。そのため月はいつも同じ斑紋を見せている。

1カ月29・5日なのでひと月が29日（小の月）と30日（大の月）しかない。31日はあり得ない。1カ月の始まりと終わりは月の満ち欠けに対応している。月末は晦日（晦は暗いの意）という。一年の終わりの晦日を大晦日。新月

の月始めは朔日（朔は戻る意）という（萩原朔太郎の名の由来）。

(2)時刻

時刻は数字と干支の二通りで示される。なぜか？

方角は東西南北以外に干支で示す。丑寅（鬼門）、辰巳（辰巳芸者）、未申（裏鬼門）、戌亥（城郭の乾櫓など）。方位は色でも示される。北は黒（玄）、東は青、南は朱、西は白。それぞれ玄武、青龍、朱雀、白虎の四神に相応。また季節も北が冬、東が春、南が夏、西が秋に当たる。玄冬、青春、朱夏、白秋。皇太子のことを御所の東に御殿があつて住まわっていたので「春宮」とか「東宮」とかいう。

4 度量衡・通貨表

(1)度量衡

度は「3」を覚える。量は十進法且つ1斗（18リットル）を基準に。衡は1匁3・75グラムで覚えて基準値に。分、匁から1000匁=1貫と飛躍する。

面積は町反畝歩（ちょうたんせぶ）と覚え、30歩=1畝のみ30進法で、あとは10進法。

※目安として「1反」の田んぼで収穫する米の量が「1石」、1石はおとなが1年間に食べる米の量、1石の値段は「金1両」。

距離は1里=4キロ、1町=109メートル、1間=1・8メートル

(2)通貨

金銀銅の三貨体制。

公定相場は金1両=銀60匁=銭4000文

時代が下ると、金貨（小判）の金の含有量が変動し、また物価も反映して、江戸時代後期だと金1両=銭6000文。

金は4進法。金1両=金4分=金16朱

銀は貫、匁、分、厘。10厘が1分、10分が1匁。衡の単位と同じなので紛らわしいが、銀貨を重さで価値を決めていた名残り。銀1匁は実際に重さ3・75グラム。

銭1000文=銭1貫文。古文書の中で「壱貫七百文」（1700文）などで出てくる。年貢だと「永1貫文」などと「永」が付くが、これは戦国時代の永楽銭の名残り。永1貫文=江戸時代の銭4貫文に相当する。

(3)贈答用の単位「疋（ひき）」

金100疋=金1分、金50疋=金2朱、金25疋=金1朱

銀1枚=銀43匁